

二〇二〇年度 公募推薦入学試験問題

小論文 (国際ビジネス学科)

試験日 二〇一九年十一月十六日(土曜日)

開始時刻 午前十時三十分

終了時刻 午前十一時三十分

注意事項

- 一、この冊子は表紙を入れ三ページです。落丁、乱丁、印刷の不鮮明などがあつた場合には申し出て下さい。
- 二、小論文はかならず所定の解答用紙の指定されたところに記述して下さい。
- 三、解答用紙の受験番号欄(右端の上下に二か所)には、かならず受験番号を記入して下さい。
- 四、解答用紙への記入は黒鉛筆を、消す場合はプラスチック消しゴムを使用して下さい。
- 五、解答用紙は試験が終了したら、かならず提出して下さい。
- 六、試験室内で配布された問題用紙は、持ち帰って結構です。

問題

次の文章を読み、「設問一」と「設問二」に答えなさい。解答はすべて解答用紙の所定欄に記入しなさい。

コンビニエンスストアはなぜ、深夜でも早朝でも開いているのが「当たり前」なのだろう。いまの時代に必要で、続けられるしくみなのか。

大阪府東大阪市のセブンイレブンの加盟店オーナーが、人手が足りずに24時間営業をやめて本部と対立している。営業時間の見直しを求める声は、他のオーナーにも広がる。

顕在化した課題に、コンビニ二社は正面から向き合うときではないか。24時間営業で成長した成功体験にとらわれず、必要な改革を柔軟に進めるべきだ。

誕生からおよそ半世紀、コンビニは多くの人の食を支え、イトインのある店も増えた。公共料金の支払いや宅配便の受け取りもできるようになり、災害が起きればすぐに支援物資を届ける。いまや業界全体で全国に約5万6千店、社会に欠かせぬ存在になった。

大手各社は、24時間営業を前提としている。店がいつも開いていることが客に便利であり、物流網などがビジネスモデルとして確立している、との理由からだ。

ところが、この24時間営業が重荷になり始めている。高騰する人件費はオーナーの負担で、本部には及ばない。店の業務を支える本部が優越的な立場にあり、オーナーを「共存共栄のパートナー」と位置づけながら、営業時間の裁量はほとんど与えてこなかった。

いま、客はどこまで深夜営業を求めているのか。取引先やオーナーの収入や働き方に、どんな影響があるのか。かかるコストはどれほどの程度負担すべきなのか――。

考えるべき課題は、山積している。

コンビニ各社も、対策をとってきた。加盟店に人材を派遣するサポート体制を拡充したり、レジの機能を高めて省力化を進め

◇M1(570—1)

たり、清掃の自動化に取り組んだり。セブンイレブンは3月中旬、社会の変化や客の反応をつかむための「実験」として、直営店10店で時短営業を始める。

だが、急速に進む人手不足に対応は追いつかない状況だ。

残業が当たり前だった時代といまは違う。働き方改革の視点からも、1980年代から定着してきた24時間営業への世の中の見方は、変わってきている。

ファミリーレストランは24時間営業店を縮小し、宅配業者は配達時間を見直している。

時代の変化に合わせて成長してきたコンビニだからこそ、社会のニーズや地域の事情に応じて考えてほしい。

(社説「コンビニ24時間 変化を直視し改革を」朝日新聞 2019年3月3日付、朝刊より)

承諾番号2011592 朝日新聞社に無断で転載することを禁ずる

〔設問一〕 コンビニエンスストアの24時間営業をめくり、どのような変化が生じているのか。1000字程度で書きなさい。

〔設問二〕 24時間営業は、「いまの時代に必要で、続けられるしくみなのか」について、あなたの考えを600字程度で述べなさい。

◇M1(570—2)

◇M1(570—3)